

# インヨウ・カオス

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原 ゆり

— 出会いとすれ違いの序 後編

インヨウ・カオス

「シマさん  
な、何？」

(副題 ウラの心にソエた願い)

乙女原  
ゆり

ぎこちない笑みを浮かべながらシマさんは返事をした。

「もしかして、何か隠している?」

「え、ええ……ど、どうしてそう思うの?」

言いながらシマさんは、ちらちらと二階へと続く階段を見ているような気がした。

「ん?」

私も何となく、二階に意識を向けてみると。

「……もしかして、誰か二階にいるの?」

「うえ?  
い、いや、それは……あの」

明らかに挙動不審になるシマさんの様子が、もう

答えていたようなものだ。

「バレてるか……。分かった、今連れてくるね  
すうつ、と二階にシマさんは消えていった。

「もう」

人が良いというか何というか……。

シマさんはたまに困っている見知らぬ靈を連れてく

る事がある。

なるべく止めた方がいいと話したはずだけど……。

「いやー」

音もなくシマさんは戻ってきた。

「実はね、昨日ライブを見た後にふよふよと散歩してたら、泣いてる靈がいてさ。何か困っている

「ただいまー」  
学校から帰って、玄関で靴を脱いでいると  
「お、おかえりなさい」  
天井をすり抜けでシマさんが現れた。  
「あ、シマさん。来てたの?」  
シマさんの唐突な出現には割と慣れているので驚く事無く私は話した。  
「うん、まあね……あ! き、今日、学校はどうだ  
った?」  
「うん? いや、別にいつも通りだつたけど」  
「そ、そつか。あ、昨日作ったフレーチャンブルーは  
どうだつた? 美味しかつた?」  
「普通に美味しかつたけど……」  
話しながら私は違和感を感じた。  
シマさんがこういう風に何でもない話題を振つて  
くる時は、何かを隠している場合が多いからだ。

☆  
一 出会いとすれ違いの序 後編

感じだつたから、放つて置けなくて……おーい  
天井に向かつてシマさんが呼びかけると。

「……」

女の子の靈が静かに姿を現した。

「この子なんだけど……」

綺麗な色の着物を着た女の子は、私と同じか少し

下の年齢に見えた。

「どうも……」

控えめに女の子は挨拶をした。

「こ、こんにちは……ちょっとシマさん」

私は手招きをして、シマさんを近くに呼んだ。

「靈が見えたりするだけで、別に私は靈能力者って  
訳じやないんだからね！」

コソコソと耳打ちをして隣のシマさんに言つた。

「わ、分かっているけどさ。あの子、独りで泣いて  
いて放つて置けない感じだつたし……それに、たま  
ちやん以外に靈が見えたりする人つてアタシ知らな  
いし」

「うーん……」

どうしよう……困つた。

前に母さんに、「中途半端に靈と関わるな」と注意  
された事がある。

実際に関わつて痛い目に遭つた事もある。  
「あ、あの……」

可愛らしい綺麗な声で女の子は私に話しかけてき

た。

「ご迷惑でしたら私は……」

消え入りそうな声で女の子は言つた。

「うーん……」

数秒、私は考えた。

「……うん」

連れてきたものはしようがないかな……。と、私は  
自棄に似た決心をした。

「と、とりあえず話をしましょう

「ありがとう、たまちゃん！」

シマさんは私に抱き着いて嬉しそうに声を上げ  
た。



「おつかえりー、りょう

家に帰るとリビングに、ようたがいた。

「ようた。来ていたんだ

「うん。さつきね」

ソファーに横になりながらようたは言つた。

「で、どうだつた学校は？ 魅力的な子はいた？」

笑顔でようたは僕に訊ねた。

「学校はまあ……普通だつたよ

「で、魅力的な子はいた？」

笑顔で二度、ようたは僕に訊ねた。

「どうだつたかな」

「ちえ。つまらない答え」

ソファーから身体を起こして、ようたは伸びをした。

「ようたは何をしていたんだ？　ここに来てから歩き回っているみたいだけど」

「いろいろと、な。ここがどういう土地なのかは、実際に見て回った方が分かりやすいし」

「そう」

「あーっと、それでさ」

「ん？」

ここで僕は何となく嫌な予感がした。

この感覚は今までにも何度も何度か経験がある。

これは……。

「いろいろと歩き回っている内に、困っている様子の女の子を見かけてね」

「ああ……」

これは、ようたが厄介な問題を持つてきた時に感じるやつだ。

「連れてきたんだな……」

「さつすがーりよう！　うん、連れてきた。おーい」

壁に向かってようたが声をかけると。

「あ、あの……」

女性の靈が姿を現した。

☆

「えーっと……あなたのお名前は？」

テーブルを挟んで対面に佇んでいる着物の女の子に私は訊ねた。

「アオイと申します」

静かに女の子は答えた。

「アオイさん、何か困っている事があるんですね？」

そう訊ねると。

「……」

アオイさんは眉を八の字にして目を伏せた。

「アオイちゃん。よかつたら、教えてくれないかな？」

シマさんは心配したように訊ねた。

すると。

「私は……に行きたいのです」

聞こえるか聞こえないかのギリギリの声量でアオイさんは呟いた。

「え？」

伏せていた目を私たちに合わせると、もう一度ア

オイさんは言つた。

「私はグソーに行きたいのです」

★

「私はもう一度、友達に会つて話がしたいんです」「それがあなた……アキホさんの願いですか？」

「はい」

ようたが連れてきた女性の霊の名前はアキホさんと言ひ、彼女はもう一度、友達に会つて話がしたい

といふ事だつた。

「その友達は今、どこに？」

「それが分からなくて……彼女も私と同じで靈なん

ですけど……」

どんよりとした雰囲気を纏いながらアキホさんは言つた。

「探している友達……アオイとは、私が生きている時に知り合いました」

あ、私が死んだのは最近なんですけど……と、アキホさんは続けた。

「アオイは靈だつたけど、気が合つて仲良くなつて……それで、私が死んだ後にまた会えるかなつて、いろいろと探してみたんですけど、どこにもいなく

て……」

顔を下に向けながらアキホさんは言つた。

「そうですか……」

彼女の悩みを聞いてはみたけど、僕に何ができるのだろう……。

心の中で溜息を吐いた。

小さい頃から靈などに関わってはきたけど、僕自

身に何か特別な能力があるわけではない。

「何とかならないかな、りょう？」

隣に座つてゐるようたが軽い雰囲気で訊ねてきた。

「ようたあ……」

不思議な出来事を何でもかんでも僕に投げてくる

親友に、軽くイラつとしてきたので少し睨む事にした。

「怖い顔するなつて」

おーこわい、と笑いながらようたは言つた。

「その探しているお友達の特徴などは？」

今段階では考えても答えはでない。

だから、少しでも情報を得ようと僕はアキホさんに質問した。

「えっと……名前はアオイです。着物を着ていて年齢は……あなたと同じくらいです」

そうアキホさんは答えた。

「そうですか……」

その時、ふと思いついた事があつたので訊ねてみる事にした。

「あなたがアオイさんとよく会つていた場所などに

も、いなかつたのですか？」

「はい。アオイとはよく近所の公園で会つていたんですけど、何度も行つてもいなくて……私が死んでからは一度も会えていないんです」

ぽつぽつと絞り出すようにアキホさんは言つた。

「死んでからは一度も……ですか」

そこら辺に何か現在、会えない理由があるよう

僕は感じた。

特に根拠のある理由はない。

「お、りょう、何か閃いた?」

ようたが僕の顔を見ながら嬉しそうに言つた。

「閃いたというか……何となくって感じだけど」

「その、『何となく』は結構重要なものだと俺は思  
うぜ」

「そう思う理由は?」

「何となく、だ」

ニヤッと笑いながら、ようたは言つた。

☆

「少し待つていて下さいね」

そうアオイさんに言つて、私とシマさんはリビン  
グから二階にある自室に向かつた。

アオイさんの前でひそひそと相談するのが何か嫌  
だつたので場所を変えたかったのだ。

「どーすんのよ、シマさん!」

部屋に入つて緊張が解けた私は声を潜めてシマさ

んに抗議した。

「あ、アタシに訊かないでよお!」

シマさんは、ワタワタと焦りながら答えた。

「グソーッて、『あの世』の事でしょ?あの世へ

の行き方なんて知るわけないよ!シマさんなら分

かるんじゃないの?」

「あ、アタシは靈だけどあの世なんて一度も行つた  
ことないよ!」

若干キレ気味にシマさんは言つた。

「あーもう、どうしよう……」

アオイさんの願いは私の力では叶える事ができな  
きそうだ。かといって今更、「私では力になれませ  
んので」と帰してしまうのも何だかなあ……。

「うーん、何か、何か……」

現状を少しでもマシな方へと進めたいと、私は頭  
の中を高速で回転させた。

「えーっと……うーん……あ!」

「な、何?何かいい案でも思いついた?」

ゲイつと顔を近づけて、シマさんは訊ねてきた。

「いい案つて言うか……母さんに一度、電話してみ  
るのもいいかなって」

「ん?ああ、そつか。たまちゃんのお母さんも靈  
が見えたりするんだっけ」

「うん」

そう、私の母も靈が見えたりする。

「まあ、絶対に怒られるだろうけど……」

母は昔から私に、「自分から靈に関わるのは止め

た方がいい」と言つていた。

「よ、よし！ いいかもしない、かけてみよう！」

「もし怒られそうになつたらシマさんも一緒にだからね」

「う……うん」

「……よし」

一度、深呼吸をしてから私はポケットから携帯電話を取り出した。



「見当たらないな」

穏やかな夕陽の温かさを感じながら僕は呟いた。

「こつちも今の所はハズレだ」

器具に目を瞑りながら歩いて、岩男さんは言つた。

「そうですか……」

アキホさんの話を聞いた後、具体的な解決策が特に思いつかなかつたので、とりあえず今日は、地道に外を歩いてアオイさんを探す事になつた。

効率をよくするために僕と岩男さん、ようたとアキホさんに別れて探す事にした。

別れる前に。

「今日も綺麗ですね岩男さん。今度一緒に遊びにいきませんか？」

「と、ようたは軽口をたたいていた。  
「考えておくよ」

苦笑しながら岩男さんはいつもの断り方をしていたけど。

「ようた君にも困つたものだね。今はあまり目立つ事はしない方がいいと、私は思うのだけれど……」

「ふーと、息を吐きながら岩男さんは言つた。

「ま、いいように考へるなら、歩き回る事によつてこの土地の事が分かるつて事かな」

「そうですね」

岩男さんの言葉に僕は頷いた。

「リョウ君的には今回の事はどう考へているの？」

薄く目を開いて岩男さんは僕の方を見た。

「そうですね……。岩男さんの言う通り、なるべく目立つ事は避けたいです。けど……」

「けど？」

「何と言うか、アキホさんの友達のアオイさんを探す、という今回の事は僕たちにとつても何か重要な意味がある……と、思うんです」

「ほう？」

「何となく……ですけどね」

苦笑いしながら僕は言つた。

「いや、リョウ君の直感は大事にした方がいいと思うよ」

微笑みながら岩男さんは言つた。

「あ。さつき、ようたに似たような事を言われました」

「本当に?」

岩男さんは微妙な表情を浮かべた。

その時。

「た」

「おつ」

岩男さんの動きが止まつた。

「一匹に何か反応あり。一旦、戻す?」

「そうですね」

「了解」

岩男さんはその場に屈んで、右手の人差し指で軽く

地面に触れると。

「私の前に姿を現せ」

と言つた。

すると、触れた地面に複雑な図形が現れ、その上

に一匹の茶色い猫が現れた。

「私の中に戻れ」

岩男さんは猫に左手を向けて言つた。

「にゃ」

すると、猫は軽く鳴いて姿を消した。

「リョウ君。『茶色』が得た情報は、ここから少し

離れた場所で、アオイさんらしき霊を目撃したこと

がある野良猫がいたって」

「それじゃあ、今日はそこまで行つてみましよう

か

「そうだね。残りの二匹もそこに着いたら戻そ  
うか」

「はい」

夜になる前に何かしら進展がありそうでよかつた  
と、僕は心の中で軽く息を吐いた。

☆

「だから言つたでしよう!」

電話で母さんにアオイさんについて相談してみると、予想した通りまず最初に怒られた。

「に、睨まないでよ……」

電話越しに母さんに怒られながら、私は横目でシマさんをジッと見た。

数分後。

「……事情は分かった。えーっと、たしか……夏美さん……そうだ。夏美さんて人を訪ねてみなさい。たま」

はあ、と溜息を吐きながら母さんは言つた。

「夏美さん? それって誰?」

初めて聞く名前だ。

「確かに……与那城夏美(よなしろなつみ)さんって名前の人で、私の遠い親戚にあたる人。家が代々、靈とかに関する相談に乗つたりしていたはず……」

思い出すようにして母さんは言った。

「へーそんな人が親戚に……」

驚いて、私は続けて訊いた。

「もしかして、その人って、『ユタ』ってこと?」

「うーん……どうだろ。私も実際には会った事ないし。でも今、頼れそうな人はその人くらいしか思いつかないなあ」

「うん……」

夏美さんの家の場所を知つていそうな親戚に電話して訊いてみるから、分かつたら後でまた電話する

る

「うん。お願ひ、母さん」

ピッと電話を切つた。

「どうだつた?」

おそるおそるといった表情でシマさんは訊ねてきた。

「んー……何か、『夏美さん』って人に相談してみるのがいいかもって」

「誰? たまちやん知つている人?」

「ううん。母さんも会つた事はないけど、靈に関する事の相談に乗つてくれたりする……らしいよ」

「そつか……」

「母さんが、夏美さんの家がある場所を調べて後で連絡するらしいから、今のところはそれを待つ……つて感じかな」

うーん。ひとまず方向性は決まつた感じだけど、まだまだ不確かな事が多いなあ……。

「あの、たまちやん。とりあえずその夏美さんに会うまでアオイちゃんは……」

「うん。ここにいてもらつた方がいいかも」  
私がそう言うと。シマさんは嬉しそうな表情になつた。

「ありがとう、たまちやん!」

つづく